

牛群検定の利活用などについて解説記事を掲載しています

1 時評 分娩間隔の延びを考える

デーリイマン12月号 酪農学園大学循環農学 堂地修 教授

牛群検定における平成23年分娩間隔が全国平均で438日(北海道432日、都府県449日)と過去最高となった要因等をわかりやすく解説されています。

2 酪農を図で見る 検定済種雄牛の遺伝的能力が高くなってきた理由

デーリイマン12月号 酪農・乳業研究会

種雄牛を作出する後代検定のしくみがわかりやすく解説されています。

3 新しい検定成績表について(その23) 一牛群平均情報の活用(ホームページ紹介) —LIAJニュース(家畜改良事業団) N o 1 3 7 平成24年11月号

当団のホームページには、検定成績表の都道府県平均値などいろいろな情報が満載されています。平均と比較することで、みなさんの酪農経営の良いところと改善すべき点が見えてきます。

冊子の入手については、最寄りの種雄牛センターまたは事業所にお問い合わせいただければ、無料でお送りします。

バックナンバーは、以下の当団ホームページをご参照下さい。

<http://liaj.lin.gr.jp/japanese/kentei/kentei.html>

牛群検定情報

検索

冬季の子牛管理は下痢にご注意！



ルーメンが未発達な子牛は、成牛と異なりルーメン発酵熱を得られないので、寒冷には著しく弱く、冬季には下痢や呼吸器病に罹りやすくなります。予防としては、まず保温を第一に考えます。分娩後直ぐに羊水を清潔なバスタオルなどで拭き取ること、隙間風を防ぐこと、良く乾いた敷料をたっぷり使うことなどが重要で、ウオーマー(ジャケット)も有効です。カーフハッチ(ペン)などは良く清掃し、風向きはハッチの後ろから当たるようにし、雨や雪が入り込まないよう地面より高くして設置してください。

また、冬季に限らず「初乳の早期給与」は重要です。初回の初乳給与は遅くとも生後6時間以内に行い、生後12時間までに合計4リットル以上、24時間以内に6リットル以上(体重の10~12%)を目安に与えます。感染症を予防する免疫グロブリンを豊富に含んだ良質な初乳の条件は①乳房炎に罹患していないこと、②血乳でないこと、③初産より2産以上の経産牛の初乳であること、④分娩前に漏乳していないこと、⑤衛生的に搾乳され、取り扱われていることなどがあげられます。これらの条件に適した初乳から発酵初乳や冷凍初乳を作っておくと良いでしょう。なお、乾乳期間中に乳房炎が完治しているとは限りませんので、検定成績表で前乳期の体細胞数、特に泌乳末期の体細胞数を良く確認しておくと共に、初乳の乳房炎検査をする必要があります。

繁殖台帳Webシステムのスマートフォン対応



パソコンや携帯電話で牛群を管理できる繁殖台帳Webシステムについては、牛群検定の実施農家や指導にあたっている方々に大変ご好評を頂いています。これまで、スマートフォンにおいて一部機能が使えないなどの不具合が散見されておりましたが、この度、システムを改善し対応が取れるようになりました。

人気のスマートフォン^{注)}で繁殖台帳Webシステムをどうぞご利用ください。

(注) Android 搭載のもの

新年明けましておめでとうございます。
牛群検定関連のお役立ち情報を、
本年も続けて提供させて頂きまので、
どうぞよろしくお願ひします。



搾乳量18年で40%増 「牛群検定」が奏功

県内乳用牛の1頭当たりの搾乳量が増加傾向を続けている。沖縄総合事務局によると、2011年の1頭当たりの搾乳量は1993年と比べ約40%増加、93年当時全国平均の80・5%程度だった搾乳量は11年度は96・5%と16・5ポイント伸びた。県酪農農業協同組合（八重瀬町、新里重夫組合長）は、個体ごとに情報分析して適正な餌量などを把握する「牛群検定」を実施。乳量改善に効果を上げている。

関係者らが1頭当たりの搾乳量の上昇に取り組んでいる背景には飼料価格の高騰などで県内の酪農家数、生乳生産量がともに減少し続けている状況がある。関係者らは生産者の所得安定を図り、生産量低下に歯止めをかけたい考えだ。

牛群検定では、県酪農農業協同組合に所属する酪農家に専門の検定員が月1回訪問し、乳量や乳成分などを1頭ずつ調査する。農家はその結果を基に優良個体を選抜。雄と掛け合わせ、後継牛を育成する。それを繰り返すことで、優秀な乳用牛の確保を図る。

県内乳用牛はこれまで北海道産が大半を占めていたが、飼料価格の高騰などで、約10年前から価格が上昇。県内で後継牛の育成が必要になり、同組合は04年から検定加入を推進。当時約20農家だったが、現在は組合70農家中48農家が検定を受ける。

その結果、県内乳用牛の1頭当たりの乳量は、93年は5,449キログラムだったが、年々増加。11年は7,750キログラムで、同年全国平均の8,034キログラムに迫るまでに改良が進んだ。（右図）



1頭当たりの乳量で成果が出ている一方、課題もある。同組合によると、沖縄の亜熱帯性気候は乳牛にとって過酷な環境だという。そのため、県内では大型ファンや細霧システムなど暑熱対策にコストがかかる。飼料もほとんど県外から購入しているため、乳価が高くなってしまうという。

11年の県内飼養戸数は、トウモロコシなど穀物価格の国際的な高騰などで93年から52・2%減の86戸。県内生乳生産量も、同年比22・8%減の2万7,589トンにまで落ち込んだ。

同組合の山内高志生乳検査課係長は「生産量をこれ以上は下げたくない。牛群検定をベースに農家の所得安定を図れば、新規就農にもつながる」と期待した。

乳牛 15 歳で 11 産

まだまだ現役 岡山県笠岡市・小原 康俊さん

【岡山支局】笠岡市の小原牧場（乳牛 250 頭、フリーバーン牛舎）の小原康俊さん(32)が飼養する雌牛「サウンド ビー メドレー」は、1997 年に同牧場で誕生。通常の使用期間約 6 年を大きく上回る 15 歳で、大きな疾病にかかることなく順調に分娩を重ね、11 産した乳牛だ。

今年 3 月には家畜人工授精事業体協議会から、生涯乳量 5 万キロ以上、体格得点 85 点以上の牛に与えられる「生涯能力優秀雌牛」として表彰された。

康俊さんの弟・祥宏さん(29)は、現在まで生産活動を継続できた要因を「この牛だけ特別に手をかけてきたわけではないが、体が小さめで、足が丈夫だったからだろう」と話す。

さらに祥宏さんは「10 月に無事 11 産目を終え、順調に経過しているので、次の人工授精も検討している」と期待する。



「長く生産活動を継続できる牛をつくりたい」と祥宏さん